



1995 年 (平成 7 年)
4 月号 (No.599)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150 円

目 次

シンポジウム「登山と疲労」	1
第31回秩父宮記念学術賞受賞	3
マカルー登山隊	3
追悼・辰沼廣吉さん	4
追悼・嶋原啓佑さん	4
自然保護随想	5
報告	
講演会「山の高さの測定」	6
第9回国際低酸素症シンポジウムに参加して	6
平成6年度海外登山基金について	7
東西南北	
被災お見舞いにお礼申します	8
単身の山(1)	8
高野鷹蔵氏の書簡から(2)	9
ウエストンの写真	10
俳句・八方尾根懇親スキー山行	10
詩・ハクサンコザクラ	10
俳句・三水会現地集会にて	11
ムスタンの旅	11
山と医療	12
図書紹介	13
書籍受入報告	15
新入会員・住所変更	15
会務報告	16
ルーム日誌	17
INFORMATION	18
創立90周年記念事業募金応募状況	18

▶日本山岳会事務取扱時間
月・火・木・土曜日 10～20時
水・金曜日 13～20時
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜日を除く毎日 13～20時

シンポジウム「登山と疲労」より 疲労のメカニズムを 正しく理解するために

医療委員会・科学研究委員会

平成六年十一月十九日午後、東京渋谷の青山学院大学で、医療委員会と科学研究委員会共催による「登山と疲労」に関するシンポジウムが九十四名参加して開催された。今回は、疲労の問題を登山家、運動生理学、スポーツ医学、行動科学といったいろいろな立場からとらえ、その内容を理解することを目的として実施された。以下に、その概要を報告する。

■中高年の高所登山

最初に、本会員で登山家の貫田宗男氏が、中高年の高所トレッキング登山の現状、特徴とその対応について講

演した。

最新例として、宮原魏氏(日大OB)のエベレスト還暦登山(日経新聞十月十八日掲載)に同行した際の所感を述べて、疲労克服のためには、高所登山

における高度順応、余裕のあるスケジュール、交通手段の有効利用による体力温存などが重要であるとの指摘があった。

また、酸素摂取量の重要性が具体的に語られた。すなわち、宮原氏は、登りで三リットル/分ではきつかったよううでスローペースであったが、四リットル/分にした途端に行動が楽になってペースアップした。下りでは酸素残存量を考慮して二リットル/分にしたから、貫田氏自身急にとっても苦しく感じたことが述べられた。

これらの経験などからして、疲労と高度順応は微妙なバランスの上に成り立っているように思われる、との見解が示された。

■登山中における疲労

ついで、国際武道大学助教授の山本

正嘉氏から、登山中における疲労として、酸素不足、エネルギー補給不足、水分不足の三つに分けて、その内容と



熱心に聞き入るシンポジウム参加者

対策に関して、多くの実験データをもとに次のような講演が行われた。

①酸素不足になると疲労物質の乳酸がたまって、疲労に至る。この閾値には、個人差がある。判定法としては、心拍数と主観的運動強度（例えば六段階中の三、四段階がよい）の併用があげられる。この疲労は、高所登山を除くと、とくに初心者によく見られる。

②酸素摂取能力を高めるためには、日ごろからトレーニング（全身持久力）により、閾値を高くする必要がある。高所登山の成功率は、この値がとくに重要である。

③エネルギーとしては、炭水化物と脂肪が疲労と密接に関係している。脂肪は、人間の身体の中に一週間分ぐらい貯蔵できる。一方、炭水化物は、一時間半程度で枯渇してしまうが、補給すればすぐ回復する性質を有している。

④登山はエネルギー消費量が非常に大きい（マラソンの二〜三倍になることがある）ので、とくに炭水化物の補給が重要である。しかも、炭水化物は、脳を含めた神経系の唯一のエネルギー源となっていて、不足するとバランスの失調や判断力の低下などがおこり、事故の引き金になりやすいので注意を要する。

⑤水分不足は、体温上昇率が著しくなると疲労が激しくなるので、水分喪失

量と同程度の水分を意識的に摂取する必要がある。

⑥登山中には食料と水の補給が重要であるが、精神的に実行できないことがある。そうすると、判断力などに影響が出やすい。

⑦登山で必要とする持久力や筋肉運動のトレーニングとしては、登山に近い条件のスポーツ（自転車、ジョギング、歩行）が適している。また、荷物を背負って歩くため、腹筋力のトレーニングが重要で、スワット、かかとあげ、上体おこしなどがよい。

⑧二十歳代と比較すると、六十歳代では持久力が半減しているため、中高年の人はとくに注意する必要がある。

また、質問の中で、外気温と疲労の関係が問われたが、最近では衣服が改善されていること、持久力のトレーニングが耐寒性に対して強くなることが講師から指摘された。

■スポーツ医学からみた疲労

聖マリアンナ医科大学助教授の武者春樹氏が「スポーツと疲労」と題してスポーツ医学の立場からとらえた疲労について、次のような講演があった。

登山の基本的トレーニングとしては、持久運動を基礎とした、かなり強度の高い全身筋肉トレーニングが必要であるが、オーバートレーニングに対する

報告例が乏しく、他の類似種目（主にマラソン）からの推測の域を出ないのが現状である。

トレーニングを実施すると疲労が蓄積されるので、休養と栄養補給により取り除きながら、運動能力の維持向上を図る必要がある。疲労を十分に取除かないで負荷を増していくと、オーバートレーニングとなって、運動能力の低下、倦怠感、下肢病状、睡眠症状などをきたし、回復にも時間がかかってしまう。オーバートレーニングの対策としては、自分自身の健康の指標（体温・血圧・心拍数・体重変化など）を把握するとともに、専門家と相談しながら効率的で適切なトレーニングメニューを設定することがあげられる。

次に、睡眠不足による疲労としては、一晩だけの不足によって乳酸が蓄積されやすくなるものと、慢性的不足によって最大酸素摂取能力の低下をきたすものがある。

急激な登山を行うと、筋肉痛が生じる。この原因としては、乳酸の蓄積と筋肉の炎症によるものとがある。前者は栄養の補給によりすぐに回復するが、後者は百二十時間たっても回復しないことがある。これは、炎症により筋肉に栄養が補給されなためである。したがって、負荷の強い登山の後には、例え自覚症状が消えても筋肉の炎症の回

復には時間がかかるので、注意する必要がある。

また、疲労と死について質問があったが、疲労そのものが直接死に結びつくことはなく、他の要因（例えば、寒冷による体温低下など）を誘発することによるものと思われるとの、講演者の見解が示された。

■疲労回復と栄養

慶応大学講師の大西祥平氏が「高所における疲労回復のためのエネルギー補給」という題目で、スポーツ医学の立場から疲労と栄養の関係について次のように講演した。

エネルギー補給に欠かせない酸素は、エベレストの頂上では平地の約三分の一に減少するため、人体の各組織への酸素供給に影響を及ぼす。すなわち、酸素の最大摂取量減少、筋肉への輸送の低下、心拍数増加などをもたらす。

また、高所では安静時のエネルギー消費量が増大し、一日の消費量も増大する。したがって、高所では脱水などの要因も加わって体重の減少が起こりやすいので、これを防止することは疲労の予防にもつながる。とくに、登山ではエネルギー補給源として脂肪があまり使えず、炭水化物の摂取が重要で、消費量の約六割を賄う必要がある。

安静時や軽い運動の場合、エネル

マカルー登山隊 大雪のため道路閉鎖も!!

2月15日、先発偵察隊として重廣隊長、山本登攀隊長、田久和マネージャー、竹内隊員と、途中まで同行する藤平総隊長、村井の6名が成田から北京～ラサに向けて出発した。2月22日重廣隊長以下4名は、負傷のためチベットのルクズで帰国する藤平総隊長、村井の2名と別れ、偵察活動に入った。

3月1日、田辺、山本(篤)、谷川、荒井隊員がカトマンズへ向けて出発。3月8日、渡邊、馬場、小野、松原、岡本、志賀ドクターがカトマンズへ出発。3月10日、本隊の10隊員とシェルパは、隊荷とともに中国とネパールの国境の町コダリに到着した。しかしザンムーとニェラムの間の道路が雪のため閉鎖。ニェラムの重廣隊長と電話連絡のため、馬場、谷川隊員がチベットのザンムーに向かう。

大雪のために偵察活動に苦労した重

廣隊長ほか3名は、3月10日にニェラム着。以下重廣隊長からの電話連絡「今春は1988年以来の大雪で、ラサ空港も閉鎖され、各地の村落が孤立し、混乱している。ザンムー、ニェラム間の道路約15キロメートルが雪のため閉ざされ、当地の共産党委員会は除雪作業を開始したが、除雪には最低でも1～2週間かかるので、本隊10名のスケジュールは遅れる。重廣隊長以下先発隊の4名は、3月13日、再びニェラムを出発して登山活動に入り、C2までのルート工作を行い、本隊の到着を待つ。

本隊の到着は大雪のため1週間以上延びるが、登山活動に支障はなく、この遅れは取り返せるので、心配しないでいただきたい」

と力強いメッセージが寄せられた。

(3月11日 マカルー登山隊事務局)

ギー供給源は脂肪が中心となるが、中等度以上の運動では炭水化物が中心となる。中等度までは酸素を十分利用(有酸素運動)して脂肪および炭水化物からエネルギーを産み出し、分解物として水(汗などで体外に放出)と二酸化炭素(肺から放散)を産む。一方、中

等度以上になると、酸素を利用せずに炭水化物の分解からエネルギーを産み出すが、疲労のもとになる乳酸の蓄積を生じる。また、高所の運動では脂肪や炭水化物の代謝が制限されるため、分岐鎖アミノ酸(タンパク質の一種)の代謝が

重要になる。この役割は、乳酸とともに疲労の指標となるアンモニアを処理するのに用いられる。疲労を起こす機序としては、アンモニアの中樞神経系への作用、神経細胞の興奮性の低下作用、呼吸の促拍作用などが考えられる。ところで、運動中にエネルギーを補給しても、筋肉での蓄積には直ちに寄与しない。すなわち、筋肉を休ませた上でないとエネルギーの蓄積はできない。したがって、休養をとることは栄養補給の面からも重要である。

■行動科学から見た疲労

最後に、本会会員で城西国際大学教授の千葉重美氏から「疲労と遭難」と題して行動科学の観点からとらえた疲労についての講演があった。

疲労には肉体的なものの以外に、精神的疲労(心の疲労)と情動的疲労(情報整理)があり、人間の健康はこれらのバランスの上に成り立っている。そして、二、三の実例を取り上げた分析の結果、登山ではエネルギー消費量が大きいために、疲労により気象条件の変化などの自然環境の変化に対処しきれないケースも見受けられる。したがって、心身ともの健康であることを自覚し得るように行動することが重要であることが指摘された。

*

エネルギー消費量の大きい登山は、疲労と密接な関係にある。中高年者の登山が急増する中で、疲労のメカニズムを正しく理解していくことは、個人の健康状態の維持はもとより、遭難防止上からも非常に重要なことであり、これらの内容が広く普及していくことが望まれる。

なお、当日の予稿集の残部がありまので、ご希望の方は、JAC事務局内・科学研究委員会宛に、七百七十円(送料込み)を同封してお申し込みください。(大森薫雄・森武昭)

「山岳地域における自然エネルギー利用の実用化研究」が第三十一回秩父宮記念学術賞に

故秩父宮殿下が、日本の学術振興のために、多大の尽力をされた御事跡を記念して制定された、秩父宮記念学術賞の第三十一回受賞者に、神奈川工科大学自然エネルギー利用研究グループ(代表者・鳥居亮名誉教授)が決定。その表彰式が去る三月十五日、千代田区丸の内日本工業倶楽部で、秩父宮勢津子妃殿下ご臨席のもと厳粛に行われた。

この表彰式には、鳥居亮名誉教授(本会会員)、森武昭教授(同)、木村茂雄

助教授が出席、沢田敏男日本学術振興

会会長・選考委員会委員長が式辞を述

べ、久城育夫選考委員会委員の授賞対

象となった「山岳地域における自然エ

ネルギー利用の実用化研究」の業績紹

介に続き、沢田会長から鳥居名誉教授

に賞状、賞牌および記念品の授与、朝

日新聞社から副賞金五十万円が贈呈さ

れた。勢津子妃殿下からは「美しい自

然を次世代に残すために貴重な研究で

あり、今後も健康に留意し、研究活動

を続けられるように」との業績を称え、

励ましのお言葉があった。

与謝野馨文部大臣の祝辞は岡崎トミ

子政務次官が代読、受賞者挨拶をもっ

て式次第を終え、席を移して祝賀パー

ティーが開かれた。

この表彰式には、日本山岳会会員ら

約二百名が出席した。(高田眞哉)

追悼 辰沼廣吉さん



山田 二郎

我々の敬愛する辰沼廣吉さんが、今
年二月十二日に七十九歳の生涯を終え

られた。

辰沼さんの正式な追悼文は、いずれ

『山岳』に適當な方が執筆されると思う

ので、私の個人的な思い出を述べて、

故人の冥福を祈り、その人となりを偲

ぶよすがとしたい。

■重裝主義一徹しい一面

第二次マナスル遠征は地元民の反対

で、やむなくガネシヒマールに目標

を変え、登路の偵察をしていたときの

こと、久しぶりの好天に私たち若手数

人は北稜東面でのルート偵察に出かけ

た。氷河からしばらく登って傾斜も急

になり、全員アンザイレンでオーバー

ハングした岩場を登っている最中に、

上の雪田からの表層雪崩に見舞われ、

岩場からたたき落とされてしまった。

アンザイレンのお陰で間もなく全員が

自力でデブリから脱出、事なきを得て

BCに逃げ帰ることができた。

我々を待っていたのは辰沼ドクター

からの雷であった。「天気になったか

らといって雪の落ち着くのも待たず、

ノコノコ出かけてゆけば雪崩にやられ

るなどあたり前じゃないか！ 君たち

はヒマラヤまで来て、そんな初歩的な

ミスを起こすとは何ということだ！」

言われてみれば当たり前のことで、

一同「青菜に塩」、ほうほうの態で退

第一次マナスルから帰った私を待っ

ていたのは、新築した家の代金をめぐ

るトラブルであった。かなりまとまっ

た資金が必要で、八方手を尽くしたが

なかなか困難で、持っていたカメラ(昭

和十三年に父親が買ってくれたセミイ

コンタというドイツ製の高級品で、マ

ナスルにも持っていたもの)を処分

して、どうやら窮地を脱することがで

きた。愛着はあったが、その後このこ

とは忘れかけていた。ところが十数年

前、辰沼さんの呉服橋のお宅で会合の

あったおり、仲間の一人が「山田さん、

あなたが持ちだだったイコンタ、あれ

はよいカメラでしたがどうなさいまし

た？」と言う。「ああ、あれは残念だ

ったが大分前に食うに困って売り払っ

ちまったよ」と答え、その後はまた別

の話題に進んでいった。

ところが、数日すると辰沼さんから

電話で「ちょっと渡すものがあるから、

ついでのときに家に来てくれないか」

という連絡を受けた。何か旅行のお土

産でもくださるのかな、と思ってお宅

を訪ねると、何と四十年余も前に手放

したまま忘れ果てていた、あのイコン

タではないか。金に困った後輩のため

にカメラを買ってくださったのは、何

とその場に居合わせた辰沼さんだった

終生忘れることはないだろう。このカ

メラは今もって立派に役立っており、

山で一緒に過ごした会員の中にはご記憶の

方もあろう。

このほかに、新人として初めて徳本

峠越えをしたときにも、途中で荷物を

担いでいただいたことなど、ずいぶん

公私にわたってお世話になったまま、

何のお返しもできないうちにお別れす

ることとなってしまった。

いまはこの心の中に空いた穴を埋め

る術もなく、ただご冥福を祈るばかり

である。

追悼 嶋原啓佑さん



日下田 実

昨年十二月に嶋原さんにお会いした
ときは、ベッドに休んではおられたが大
変お元気であった。一月末に予定し
ていた恒例の稲門山岳会の新年会には
「何とか出られるだろうから一緒に行
こう」と話しておられた。また今年に
入り一月四日に電話をいただいたとき
も、いつもの嶋原さんと変わりなく、

これなら新年会にも出られるものと思
っていた。

しかし一月二十日の朝、主治医の熊
谷先生から嶋原さんの容体が悪いとい
う知らせを受け、取るものもとりにあ
えず自宅に伺ったが、四日に電話で話
した嶋原さんとはまったく変わってし
まっていたので驚いた。洋子夫人にお
聞きしたところ、年末に長男の潤君が
イタリアから帰国されてからはすぐ
調子がよく、元気であったという。と
ころが六日に潤君がイタリアに行っ
てから調子が悪くなったということ
であった。今までも何度か死地を脱し
てきた嶋原さんのことだからと、一縷
の望みを抱いて辞去したのであるが、
残念ながら翌二十一日幽明境を異にさ
れたのである。

嶋原さんは昭和二十一年四月、早稲
田大学入学と同時に山岳部に入部され
た。それ以前の山歴についてはほとん
ど知らないが、戦争末期に中学時代を
過ごされているので、おそらく山登り
はされなかったのではなからうか。ど
ういうことで山岳部に入部されたのか、
今ではうかがう由もないが、いずれに
しろ早稲田に入られてから本格的な山
登りを始めたものと思う。

大学時代では、昭和二十二年十二
月から昭和二十三年二月までのペタガ
リ岳遠征には最下級部員として参加され

ており、その後山岳部の山行にはほと
んど参加されている。昭和二十五年度
には山岳部代表委員・主務として部の
運営に当たり、昭和二十六年三月に早
稲田大学第一政経学部を卒業された。
卒業後、岩井産業(株)(現日商岩井)に
入社され、インドに勤務されたことも
ある。

卒業後も仲間と山行をされていたが、
昭和三十年一月、ナイロン・ロープ事
件として知られている前穂東壁の遭難
事件では、たまたま近くにいたのでこ
の救出作業をされている。

嶋原さんはとくにビッグ・クライム
といった山登りをしたわけでもなく、
またカリスマ的に私どもをリードした
わけでもないが、その優れたバランス
感覚をもって巧みに私どもをリードし
てくださった。どんなことがあっても
弱音を吐かず、あののんびりした性格
でものごとに対処される様子は、私ど
もに大きな安心感を与えてくれたもの
である。

私どもにとっても、嶋原さんを失っ
たことは大きな痛手であるが、今日国
際的な問題や環境問題を抱えている日
本山岳会にとっても、嶋原副会長を失
ったことは大きな痛手であると思う。

最後に、「峯雲院啓照日佑信士」の
ご冥福を心から祈念して追悼の拙文を
終える。

自然保護随想

梅澤親光の 山岳保護論

関塚貞亨

山岳会の発起人のお一人、自然保
護の分野での先覚者、我々の大先輩
である梅澤親光の業績についての記
述は少ない。私が知っているのは、
田部重治著『山と溪谷』の秩父会の
項に、その風貌の一端がうかがえる
のみである。

その業績については、山岳八五年
と八六〇八九年に連載した「自然保
護の歩み」で簡単にふれたが、山岳
一三年第三号の雑報欄に机上談山と
して投稿している山岳保護論は素晴
らしいものである。

神奈川県庁および横浜市役所の職
員に講演(大正七年)した内容をま
とめたもので、まず「富士登山者が、

砂走を降りる際に多少の砂が伴われ
て落ちる。しかしその砂は一夜のう
ちに全部もとに帰るといふ言伝えが
ある。この砂もどりの話は、富士以
外に諸方の山にもある。祖先は山霊
が山中の砂一粒でも山を去るのを惜

しむためだと考えていた。祖先は、
山中の一木一草は勿論、砂一粒も、
故なく下界に下ろすまいという考え
があった。山のもを下界に下ろす
のはいけない、下界のものも長く山
へ置いてはいけない。山によっては
山麓で草鞋を昇降ともに更めさせて
上下の土砂の混じるのを防いだとい
ふところもあるくらいである」と山岳宗教
の話をする。

霊山に入るために衣服、履物を更
める、というこれらの話は、山岳地
帯への帰化植物の侵入を防ぐなど現
在の環境保全につながる示唆に富ん
でいる。また、山のもをを下界に下
ろすのはいけない、というのは高山
植物の保護につながっている。

梅澤親光は、山岳宗教論から入っ
て、現代の登山の風潮にふれ、山に
登るときだけ、にわかに科学者にな
って、持ち切れないほどの高山植物
を採集する多くの登山者に反省を促
し、山岳保護を訴えている。

祖先は山を敬い、山岳宗教が山の
自然を守ってきた、という卓見は、
講演から七十七年経った現代でも新
鮮だ。山岳会ルームに、眼光は鋭い
が、やんちゃで愛敬を秘めた風貌の
写真が飾ってある。接するたびに早
逝を惜しむ思いを強く感じる。

REPORT

報告

REPORT

講演会

「山の高さの測定」

科学研究委員会

一月二十五日、『山の高さ』の著者鈴木弘道氏をルームにお迎えして講演会が行われた。

富士山頂の三角点は一九二六(大正十五)年設置、一九六二(昭和三十)年低下改埋(注・三角点を低い位置に埋め直し、観測すること)されて、三七七五・六三メートルとなっている。一九九三年に、初めて頂上まで二級水準測量が行われ、山麓の三角点五・水準点三点と山頂間のGPS測量(人工衛星による測量)も行われた。この測量の結果は国土地理院の公式の値にはならないが、剣ヶ峰の三角点は設置以来旧測量の誤差の範囲以上の変化はないことが分かった。

ビデオは、富士宮浅間神社への参拝からはじまり、御殿場の水準点を基点として山頂までの直接水準測量の様相を撮っている。測量には五十日を要した。水準測量で得た値三七七四・九七

メートル、GPS測量で得た値三七七五・六六メートルの約七〇センチの差は、富士山が新しい山で地殻が平衡の状態になっておらず、山頂直下のジオイド面の楕円体面上の高さが周辺より七〇センチ高いことを意味する。

エベレストのビデオは、スイスのウイルドとケルンを合併したライカのGPSの測量を追って撮っている。隊長はイタリアのジョルジョ・プレッティである。

インド測量局が世界最高峰であるエベレストを発見したときの測量(一〇〇マイル以上はなれたインド平原からの片観測)では八八四〇メートルであった。一九〇二年の測量では八八二メートル、そして現在、標高は八八四八メートルが用いられているが、これは一九五四年にやはりインド測量局が測量したもので、当時の測地学の粋をくくして得られた値であった。

一九七五年には、中国隊がチベット側から登頂したときに、山頂に測量用標識を建て、天文、重力の測定も行い、ジオイドの推定も慎重にして、八八四八・一三、±〇・三五メートルを得た。

積雪の深さ九二センチメートルを除いており、前記の値よりいっそう精密なものと考えられる。

一九九二年秋のイタリア隊は、山頂に光反射用のプリズムをつけた標識を建て、GPSも運び上げ、中国およびネパールとの共同作業によって南北両側山麓から距離測定を含む測量を行い、山頂と南北両側でGPSの同時観測を行った。九時三十分には頂上に達し、山頂に約二時間滞在した。このときの高さは、八八四六・一〇メートルで積雪の深さ二・五五メートルを除いている。計算の詳細は未発表である。

一九七五年に、中国隊がエベレスト山頂に測量用標識を建てて測量したことも、今度、一九九二年に中国、ネパール、イタリアの三国が共同作業によって山頂と南北両側からのGPSの同時観測を実施したことも、画期的なことであった。

エベレストを除いて、高山では測量のために登頂することができないのが普通である。登山でできない高山の高さの測量の誤差としては、①観測点の高さ ②光の屈折量の推定 ③零点である山頂直下のジオイドの推定、がある。

高さとは、ジオイドからの高さである。しかし、GPSは地球の中心からの距離に関する測量であり、地心距離が重要になる。ちなみに地球の中心から

ら一番遠い世界一の山はアンデスのチンボラソ、日本では沖の鳥島となる。

*

鈴木弘道著『山の高さ』は、山の高さを求めるための理論も分かりやすく解説してあるほか、山岳標高一覧に千五百六十五峰の高さが整理されている。なお、お求めになる方の便を図って事務局に置いてあります。初版を求められた方のための正誤表も用意しています。ご利用ください。(武田満子)

第九回国際低酸素症

シンポジウムに参加して

医療委員会

一九七九年以降、二年ごとにカナダ(レイク・ルイーズ)で開催される国際低酸素症シンポジウムも、回を重ねて今年で九回目、二月十四〜十八日に開催された。世界各国から二百九十名の参加、百二十一題の出題があり、うち日本から約二十名の参加、十題の発表がなされた。

このシンポジウムは、本来高所登山医学の情報交換の場として発足したものであるが、高山病解明の根本はまず低酸素症そのものの解明にあり、それはそのまま呼吸不全症などの臨床応用につながる、として、広く『低酸素症

シンポジウム』と命名されている。したがって山とは関係のない生理学者や臨床家の出題も多い。しかし、このシンポジウムの最後の日はいつも原点である『登山医学の日』に当てられており、筆者の参加目的は結局ここにあるし、この報告もそれを中心にした。

■高山病は「低圧・低酸素症」

最近の医学界の先端的話題の一つに一酸化窒素(NO)がある。この物質には肺毛細血管を拡張し、肺動脈圧を下げる作用がある。高所肺水腫(HAPE)の成因の一つに肺動脈圧の上昇ということがあるから、フォレンワイターはNOはHAPEの予防や治療に

役立つのでは？と考へ、実際高所でHAPE患者に使用したところ、酸素飽和度は上がり、有効であった。ところが低地では肺動脈圧が下がれば動脈血酸素分圧も下がるので、どうもすんなりとNOでHAPEが治療できるとはいえない、といっている。

高山病は「低酸素症」か「低圧症」という古くからの論争がある。筆者などは、もうこれは「低酸素症」ではないのかと考えていたが、ローチは、これはそのどちらか一方ではなく、両方の「低圧・低酸素症」であるという。高山病、とくにHAPEは、細胞膜の内外における水と電解質(Na、

平成六年度海外登山基金について

海外登山委員会

今回の海外登山基金補助につきま

しては、平成六年十二月二十日まで

に応募のあった十一団体について、

平成七年一月十八日、海外登山基金

委員会にて審査が行われ、一月二十

日の理事会において承認されました

ので、報告いたします。なお、補助

金総額は二百万円です。

●百万円 日本山岳会マカルー

登山隊一九九五

●五十万円 日本大学エベレスト

登山隊

●五十万円 一九九五西蔵・日本友

好ガッシュャーブルム2

峰登山隊

以上の三隊です。交付団体には、

報告書および会計報告が義務付けら

れています。

平成七年度の基金補助については、

会報九月号に公表します。

K、Ca)のバランスの失調であるが、それは単なる酸素分圧だけの問題ではなく、全体にかかっている圧力も関係しているという。そうなる、筆者などはこれまで書いてきたものに修正を加える必要がありそうである。

昨年のわが登山医学シンポジウムに来てくれたハケットは、急性高山病に対するガモフバッグとデキサメサゾンが優れているのは最初の二時間だけで六時間ないし二十四時間後にはむしろデキサメサゾンのほうが優れていた、という極めて示唆に富む研究を発表している。このバッグの最初の二時間の効果の違いは患者にとっては重要であるから、両者の併用、つまり最初にデキサメサゾン4mgを飲ませてからバッグにいれ、二時間後に出す、という方法が最も実用的な方法だと思われる。

■「国際登山医学会」総会の日本開催にご支援を！

以上、筆者が理解できた範囲内で会員諸氏の参考になると思われたトピックスを二、三ご紹介したが、ここで本会会員諸氏にお願いしておきたいことがある。

それは、スイスに本拠を置く『国際登山医学会』の総会引き受け、という問題である。この会の会長、フランスのリシャレー教授が、この学会のニュースレターの編集委員会を日本で開くが、それに本会理事の堀井先生はじめ

日本登山医学研究会のメンバーの人たちも加わってほしいという。実は、この会の総会は二年おきで、前々回はスイスのクランスモンタナ、前回はフランスのシャモニー、次回(来年)はペルーのクスコ、ときて、次々回(一九九八年)は日本の長野でお願いできるかという相談である。この会の日本代表、信州大学の上田五雨名誉教授の了解は得ている、という。これが実現すれば、それは日本の登山医学の現状を世界に紹介する非常にいい機会なので、帰国後、上田先生はじめ関係各位と相談の上、日本登山医学研究会として極力支援する、と答えておいた。国際学会ともなれば、これは日本全体の広い支持がないと到底実現不可能である。日本山岳会の各位にも、ご理解、ご支援のほど、なにぶんよろしくお願いしたい。(中島道郎)

次代に残そう美しい山と溪

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどし投稿ください。(紙面に限りがありますので、一点につき二〇〇字詰原稿用紙五〜七枚程度でお願いします)



カット 中村あや

被災お見舞にお礼申し上げます

住吉仙也

JACの皆様へ

地震被災の一月十七日より、早くも一か月半が過ぎました。

寒かった冬も去り、陽光の暖かさと共に、椿や梅の花が春の彩りを添えて心を和ませてくれます。

被災当時は、安否を気遣うお電話をありがとうございました。また恐らくさらに多くの方々が電話をくださったのに、不通で交信できなかったと思います。感謝しております。

その後もたくさんの方から物心両面の身に余るご援助をいただきました。改めて友人の有り難さ、何ものにも替えられぬ私の宝物であると身にしみて感謝しております。

不思議なことは、ほとんどすべてが

山を通しての友人であったことです。今までの私の生活が、単なる医師としてでなく、登山を介した人生であったことが、この上なく幸せであったと驚きと共に嬉しく思っております。

二年前に医業全廃後は、写真や日記を中心に、今までの自分の歴史を整理してみる予定でしたが、資料散逸し実現できるかどうか判らなくなりました。が、これも一つの起点として新しい余生計画を立てられると張り切っております。

全壊した家(阪急神戸線・夙川駅前)の周囲の状況より当分(二年ほどか?)はホームグラウンドの目安がつかみませんので、念願の『浮草生活』を楽しむことになりそうです。

お陰様で心身共に全く健康です。ゆえ、この点のご放念ください。

とにかく、皆様のご厚情の深さにただただ感謝いたしますと共に、何かご期待に添えるような積極的な日々を送

る所存です。

遅ればせながら、簡単な中間報告といたし、重ねてお礼の言葉にかえさせていただきます。

平成七年三月五日

追伸・連絡先は一定しておりますのでTHIの田中君にお尋ねください。

THI TEL〇三―五二四五―〇五一

単身の山(1)

砂田定夫

那須と矢板に合わせて九年間勤務し、この四月に東京へ帰任した。出張先でも赴任先でも、近辺のめばしい山を探して稼ぎまくるのは、山屋の哀しい性ともいうべきか。

単身赴任を利用して単独で気ままにやる山行は、勝手に『単身登山』と称している。勤務地を基点にした山行は百五十回を数えるが、このうち那須岳を中心とした山域が四割を占める。何といっても『近くてよい山』だったからである。那須といえば、学生時代に学友たちと茶臼から主稜を北へ縦走、坊主沼に一泊して大白森を越え、二股温泉へ下った思い出がある。

赴任したその四月、朝日岳を目指して南面の急なルンゼをつめたとき、春

の北穂沢辺りを登っているような錯覚に陥ったが、すっかり気に入って、これを皮切りに那須岳通いが始まった。

ある年は、季節による山の表情の変化を求めて、一年を通し毎月いずれかの頂上に立った。同じ山でも季節とルートを選択によって、いつも新たな感動を与えてくれた。夏の早朝、出勤前に車で最上部の駐車場まで行って、峰ノ茶屋を往復してきたこともあった。

強風の吹きすさぶ厳冬よりも、やはり青い空と輝く残雪の頃がよい。赤崩山(旭岳)へ登ったのも四月、山の姿も佳いが、ルートを模索しながらの面白い山登りができた。

新緑の美しい時期は一斉に花が開く。白笹山と南月山の間は、シャクナゲ、シロヤシオが見事で、日ノ出平近辺にはミネザクラが満開になる。大峠を中心にした夏のお花畑も捨て難いし、三斗小屋宿跡から麦飯坂を経て沼原湿原に至るブナ林も趣がある。

紅葉の頃、姥ヶ平を散策するのも楽しい。以前はハイマツを分けなければ行けなかった通称『びょうたん池』はいま木道が敷かれて簡単に行ける。ここから茶臼を背景にした眺めは一見に値する。赤面山に夕方登って眺めた残照の那須連山の美しさは忘れ難いし、冬の清水平や三本槍あたりにできる灌木の霧水や樹氷も印象が深い。

最後に残った課題、御沢の「幻ノ滝」探訪、鬼面山（一六一六メートル）登頂、流石・大倉・三倉を経て音金へ下るコース、そして紅葉の鏡沼探勝。これらを昨年果たすことができた。鏡沼を除いては人に出会うこともなく、静かな山だった。

なお、大倉山と三倉山の呼称について逆の説があるのは面白い。山名の詮索は避けるが、国土地理院の地図が、ある年の改正で入れ替えたようである。栃木側では現在の地形図と反対に呼ぶ向きがあり、この山域について詳述した「三斗小屋温泉誌」（随想舎刊）では、敢えて北のほうを大倉、南側を三倉と記している。

高野鷹藏氏の書簡から(2)

望月達夫

○昭和三十五年五月二十四日・葉書

小杉画伯の事につき早速御手紙を頂き御存意有り難く感銘の至りです、ふと考へつた事は、石井鶴さん（注三）あたりを活用したら如何です、ちと小杉さんは古過ぎて、サスガ藤島君（注二）（敏男）も引ッかかりが見つかるとどうか。画家としては大下藤次郎、丸山晚霞あたり、小島君との関係もあり、更らに古くは高島北海さんな

海外の山

クープで高山病 3人目の死

江本嘉伸

五十歳、六十歳の熟年が八千メートル峰に登る時代になった、と先日書いたが、八千メートルと言わずとも、仕事が一段落して、念願のヒマラヤを眺めに行つてこよう、という中高年が最近増えている。

もちろん、山登りが好きで相應の経験のある人もいるが、遅く登山をはじめた人もおり、四千メートル以上の高度となると、初体験の人が多い。

三月六日、エベレスト街道で大阪・吹田市在住の六十歳のトレッカーが死んだ。デインボチェで気分が悪くなり、プンキという所まで下ったが、一泊して翌朝、外に出た途端倒れたという。急性高山病によるものとみられるが、衝撃は大きい。

クープ地方では今年になって日本人の死者がこれぞ三人となったからだ。しかも、いずれの場合も五十歳以上のいわゆる中高年だった。

一月二日、ゴキョ・ピーク（五三六〇メートル）をめざした千葉県

在住の五十四歳の男性が、途中のマツチャルモ（四四一〇メートル）で死んだ。暮れの休みを利用して仲間など五人で出かけたが、元日、ゴキョ（四七五〇メートル）にたどり着いたところでこの男性だけは不調でロッジに残り、四人はそのまま頂上をめざした。ゴキョ・ピークに登った四人が下りてきた時は、男性の意識はなく、他の日本人パーティーから酸素を借りて吸入させたところ、いったん意識が戻った。このため、皆でマツチャルモまで下りて宿泊。翌朝、歩きだして間もなく倒れ、そのまま死亡したという。

中高年ということ以外に、三つの死亡事故に共通する教訓がある。それは、意識を回復して「大丈夫動ける」と本人が言ったとしても、高所で一晩でも余計に過ごせば、確実に死が近づく、という点だ。

おそらく、近くにいた仲間たちも「まさか死ぬことはないさ」と樂觀してしまふのだろう。高山病の恐ろしさは、最後の瞬間にならないとわからない。

このほかにも、危機一髪で死なないで済んだ、というケースはいくつも起きている。事故の関係者も、トレッキングをアレンジした旅行社もできればそのようなケースは宣伝したくない、というのが普通だから、表に出ないまま終わることもあるだろう。それでいいのか。

日本人は、三千五百メートルを越える標高についてもっと謙虚になつていい。四千、五千メートルの山旅をすすめる旅行社は、オーバーなほどに低酸素の怖さを強調したほうがいい。そして、実際に高山病の怖さを体験した人たちは、言いくくても、その体験を冷静に仲間たちに語ってほしい。ヒマラヤのピークに登ることよりも、そのほうがはるかに勇気ある行為だと思う。

俳句

八方尾根懇親スキー山行

西山秀夫

寒紅の娘と乗り合はすペアリフト

リフト寒し六千尺の高さまで

吹き荒れし六千尺のスキー宿

望岳の部屋の小窓の目貼りかな

暖房や持ち寄る酒の色々と

水割りに氷柱をつかふとは乙な

尖りしケルンの先に雪つかず

吹雪く夜の布団の中の安けさよ

寒禽よ梢に何を見出すや

愛されてピッケルの木の古びたり

詩

ハクサンコザクラ

塔田也寿

赤く透つた光の足が

カールの斜面をのぼってくる

はるか山々の頂は

一はけの朱を天に残して

青墨色に沈んでゆく

私がこの束の間の時間の推移の中で

小さな赤紫の花々に

ども山岳会の初期とは関係があります。藤島君と御歩きの由、羨望の至り、足の痛みが「アリナミン」でとれたと喜ぶ人間になっては、終着駅もあとイクトかと云ふわけです。

(以下の二通は私が札幌市南六条西十七丁目一三五六に在住当時頂いたもの)

○昭和三十七年二月十一日・封書

札幌にて 望月岳兄

拝啓 今日茗溪堂から「山岳」の別刷(茨木君の事)を貴名で送ってくれました、一々御丁寧な御取扱で恐縮して居ります。

平常、嵩が色々とお配慮に預り居り有り難く御礼申上ます。

今月の「自然」と云ふ雑誌に久米庸孝氏が「山の遭難と天候」と云ふ如き題名で書いています、或は御存じかと存じますが、久米さんは私の長男岳雄(タケオ)(嵩の兄、現在は此二人丈け)

の中学以来の友人で、此頃大分山の遭難事件に何か書れている様です、「自然」は未だ見ませんので、どんな事を書れているか存じませんが、若し一度他の雑誌(公刊の)に出たものでも差支へなくば「山岳」に書いてもらったらどうかと、私独りで考へました、尤も私の希望は純学術的のものを頼みたいので、久米さんの専門的論文を後世に残すすかにも思いついたのです、若し御賛成を得ますれば一度久米さん

に頼んで見ます、氏の専門外の「山岳」に書いてくれるかどうかは付度出来ませんが御存意を拝承してからと存じていましたら、此幸便を得ました。

札幌の中央保健所長をしている土屋文男氏(医博)は私の馬の知己ですが何か保健上の御用が出来ましたら私の名を御利用願上ます。私も大分老人(七十八才)となり、病院通いをつづけていますが、差当り大病もなく当分生き

てゐるつもりで居ります。為めに会の為めにも何一つ働けません。

岡野さんの記念碑が出来たさうですが中々見に行く機会がありません、全く街にも出ない生活を送って居ります、街に出ると車がコワイのです、自動車事故で死ぬのは真平と念じて居りますので、取敢ず御礼少々右迄 不備

○昭和三十七年二月二十二日・葉書

御手紙拝受御尊意拝誦致しました、去る十五日から流行遅れとならぬ様にと「流感」にとりつかれ今に臥床致して居ります。何れ久米さんの方は今少し私から確かめてから申上たいと存じます。取敢ず。

高野さんからの私への書簡は以上で総てであるが、同氏は本会の初期、会の元締めの存在であつたばかりでなく、山岳写真の草分けでもあり、生来凝り性の性格から「高山深谷」のような写

真集を作成された。これらに就いては冒頭の追悼欄の文章、その他によって知っていただきたい。

中倉家でみつかった
ウエストンの写真

さがに山岳会代表 小野 健

ウエストンは、日本アルプス北部の最高峰白馬岳に登る前、アルプスの終端を確認するため一八九四年七月十九日、天下の嶮・親不知の断崖に立った。このとき、国道開削のためカットした岩壁に、開通を記念して刻まれた「砥如矢如」をみて、「日本アルプスの登山と探険」にその英訳文を掲載している。著書の中でウエストンは、このアルプス山脈の起点を形成しているのは花崗岩の岩壁であると記しているが、正しくは親不知火山岩類に属する凝灰質礫礫安山岩である。

ウエストンが登った頃の白馬岳は、大蓮華山群の主峰で大蓮華とか鍾ヶ岳と呼ばれていた。加賀藩の奥山見回り役は上駒ヶ岳とか鍾ヶ岳と記録している。現在は、北アルプスの起点親不知から白馬岳に至る梅海新道が、さがに山岳会により昭和四十六年に開通されたが、当時この新道があったら〇〇三千メートルを目指して日本海から白

恋人のように頬よせるとき
ひとは幼い感傷と

ちらりと横目で過ぎゆくだろう

しかし 私はそのとき

はるかに遠い時間の奥に

たしかに氷河の軋むのを聞き

一本の ハクサンコザクラになって

いたのだ

俳句

三水会現地集會にて

勝田房治

冬桜山

日矢差して紅蘇る冬桜

一山にこぞりてけぶる冬桜

頬赤き慈母観音や木守柚子

寄生木の入日にともる冬木立

夕月に風ののび来し秩父越

竹寺

黄昏の嶺彩つくし日脚伸ぶ

凍てし道なだめて登る山の寺

揮毫停め和尚手かざす大火鉢

梅が香を肴に朝の般若湯

地の温み抱きて二輪寒葵



中倉家でみつかった100年以上前の写真

馬岳まで縦走登山をしたかもしれない。親不知を訪れたウエストン、ハミルトン、浦口文治の一行は、その日、糸魚川新屋の古川屋に宿泊した。七月二十日は、明治二十五年に開通した姫川沿いの道路(現国道一四八号線)を人力車で往き、小滝村の村長中倉利忠宅(現糸魚川市山之坊)に宿泊した。当時の中倉家は、荷馬車により海産物等を信州(大町方面)に運ぶ運送業を営んでいた。七月二十四日、白馬岳登頂を果たして下山した一行は、正午過ぎ再び中倉家に立ち寄り帰路の挨拶をしている。利忠治村長は、国道開通のためにも多大の貢献をした村の実力者で、

人格容貌ともに立派な人物であったという。ウエストンはその著書で、

Nakagura a fine looking man, unusually tall, and with a face pleasing to a degree uncommon amongst male Japanese.

と紹介し、三井嘉雄訳著「日本アルプス登攀日記」(平凡社)には押し出しの立派な人物と記されている。

発見された写真は、中倉家玄関前で

白馬岳登山同行者の山崎新吾(ウエストンの記録には山崎巡査としかなかったが、写真の裏メモにより初めて新吾という名前がわかった)巡査と並んだスナップ写真である。俵を積んだ二台の荷車、馬を世話する馬方、中央後方に利忠治氏? と子供(利忠治氏に実子はなかった)が見える。この家は明治四十年頃焼失し、現在の家はほぼ同じ場所で間口が三間(全九間)ほど縮小されている。中倉家の系譜は、利忠治(近吉(養子)―忠治―英市氏で三)四代はご健在である。三代目より運送業をやめて豆腐屋を経営し、六十年來の手作り豆腐屋として親しまれている。

写真は、今年に入って古い写真を整理していたときに出てきたもので、本年一月、青海町の郷土史家蛭子健治氏がこの写真の中にウエストンを確認された。写真の裏側の日付は明治二十八年になっているので、撮影日よりかなり経過した後日に送られてきたのではなからうか。すでに薄茶色に変色しているが、ウエストン独特のスタイルと山崎巡査の制服直立の姿が、百年余り前の生活情景の中によりみがえってくるような貴重な写真である。

ムスタンの旅

中村あや

その前年、初めて外国人に開放されたムスタン王国へ、東九州支部の西さんと一緒に出かけようという話が出たのは、一九九四年春のことであった。それには、グルーブを作って、高い入国料を支払い、リエゾン・オフィサーをつける必要がある。

九州の西、甲斐、安藤、稲葉さん、および夫と私の総勢六名は、九四年十一月八日夕刻、香港空港で合流し、カトマンズを経てポカラに入った。ここでサードラーのダヌー氏とリエゾン・オフィサーのジャガナート氏に出会い、十日十一時、砂埃の舞うジヨムソン空港に降り立った。歩いて二分のムーンライトホテルと称する宿に落ち着き、午後はサードラーの案内で、対岸の古い村チミガオンの見学に行った。

翌朝は快晴、ホテルの正面にはニルギリが大きく朝日に輝いている。八時

出発、荷物は五人のポーターと五頭の馬が運んでくれる。町を抜けてカリガンダキの広い河原を行くと、背後にツクエピークとダウラギリが大きく姿を見せてくる。流れにさえぎられると、左岸の急斜面につけられた細道を高巻きする。対岸の山肌に刻まれた褶曲の線が美しい。カグベニの村に入り昼食、この先はムスタン王国となる。入国手続きをすませ、午後また河原歩きと高巻き、へつりを繰り返すが、風が強くなり、砂埃が吹きつけてきて、今日の宿泊予定地チャイレまで行き着けず、十七時チュクサンでテントを張ることとなった。馬、牛、山羊が行き交い、子供たちが集まってくる。日が落ちて、も相変わらず風は強く寒い。

十二日、七時四十五分出発、川に浸食されて黄土色の壁のようにそり立つ山をバックに、編織のエプロンと黒いスカートのチベタン服の女性が数人並んで畑を耕していた。カリガンダキの河原を離れて、支流に沿って登り、チャイレの村を抜ける。垂直に二〇〇メートルも深く切れ込んだ谷の崖縁をたどると、対岸には耕地が開け、白い家々が小さく見える。三五四メートルの峠を越え、十一時サマルのロッジで昼食、午後は峠を越え谷を渡り、激しい登り下りが続く。峠では強風に混じって雪もちらつきはじめた。十六

時、エクレバッティに着いたが、今日の予定地ギリンまではまだ二時間近くなるというので、ここでキャンプすることに決まる。Mさんは体調を崩し、着くとすぐ横になる。雲が空を覆い、背後の山にはうっすらと雪もついて、寒い夜となった。

十三日快晴、Mさんは高山病の症状が出て、今日からは馬で行くことになった。大きなチョルテンを過ぎ、ギリンを通過すると、あたりは褐色の乾いた景色になってきた。水蝕の巖がくつきり着いた灰色の山が並ぶ。後方に遠くアンナプルナやムクチナートの山々が白銀に輝いて見える。ガミで昼食。午後、三九〇〇メートルの峠を越える。峠には、通る人々が積んだ白い石で小山ができ、その上には白布のタルチョーが青空にはためいている。長い下り坂の先に、今夜の泊まり場チャランの村が見えた。チャランでは、眼下の平地には、石垣で丁寧に囲った、今はただ茶色一色の畑地が広がっていた。夜は降るような星空であった。

翌朝、村の高台にあるお寺を見学に行く。赤い衣のラマ僧が出てきて鍵を開けてくれる。中には沢山の仏像が並び、空、雲、火、水、土を表す五色を使った壁画や曼陀羅などがあり、真鍮の灯明台はどれもピカピカに磨かれていた。

(次号に続く)

山と医療・中島道郎

1994 年制定 UIAA 医療委員会 公認基準-7

1. 登山と栄養

登山にはいろいろな形態があるが、そのいずれもが高度に肉体を使うことを要求される行為である。これほど肉体を使うスポーツは登山においてほかにあまり例をみない。

「フィットネス」とは何か？

(訳者註：最近、フィットネスという言葉は普通に使われるようになってきているので、本文でもこれをそのまま使うことにするが、これは、快便、快食、快眠という言葉で代表される健康快適状態のことである。以下、本文でフィットネスとは『健康』と置き換えて理解されてかまわない)

肉体的フィットネスは、登山行為を遂行するための一因子にすぎない。しかしそれは極めて重要な

因子である。登山の安全を全うするためには、それにふさわしいフィットネスが必要であり、そのフィットネスを達成するには、それように工夫されたトレーニングをすべきである。

数時間ぶっ続けに山を駆け回っても別に疲れた様子も見せない登山家とは：

- ・十分かつ適切な運動を続けている人
- ・規則正しい食事をしている人
- ・エンジンをオーバーヒートさせない正しい登山計画にしたがって登る人

フィットネスの不足は、いわゆるスポーツ食品、スポーツドリンク、医薬品で補える、と信じている登山家は実に多い。そんなことは絶対にありえない。なぜなら、栄養を補給するということは単にエネルギー源の備蓄を補充するといふに過ぎないのであって、個々人の登山行為の達成度を高めるといふようなものではない。行為の達成度を高めるものはフィットネ

ス以外にはない。

不十分な肉体的フィットネスがそのことを謳ったスポーツ食品で代償されるということはない。栄養は行為を創出しない。

空腹と口渇はあてにならない指標である。肉体疲労時とか、フィットネス不十分な人にとっては、とくにそうである。高強度登山の場合、食欲不振で亡くなった人は少なくない。

登山中の飲食は、決して飢えや渇きを癒すためのものではなく、登山行為を持続させるためのものである。

成人の登山・登攀に要する推定仕事等量は、空荷で1時間、体重1Kg当たり6Kcal、20Kgのリュックザックを担ぐと1時間、体重1Kg当たり9Kcalとされる。例えば体重60Kg、行動時間8時間とすれば、
空 荷：(60×8)×6=2,880Kcal
20Kg荷重：480×9=4,320Kcal

図書紹介



邢天正・著

『邢天正登山講座』

著者の邢天正氏は台湾登山界四天王の一人だといふ。本会図書室にきている中華民国登山協会の機関誌『中華山岳』によれば、同氏は昨年二月、八十五歳で亡くなった。

本書の本領は前半にあり、著者の持つ豊富な知識と永年にわたる登山経験をもとに台湾の山が縦横に語られている。「台湾地形略述」「台湾高山の地質」「台湾山岳」「中央山脈主稜上の高山」などの項がそれである。後半は、台湾高山における動植物、高所における防寒、登山中の安全知識など登山講座的な内容になっている。

著者には膨大な著述があり、それらを四巻に分けて出版が進められている。第一巻が本書で、第二巻は登山評論、第三、四巻は登山記録である。これらが日本語で読めるようになれば、台湾の山がいつそう身近なものとなる。

台北市延平南路・戶外生活圖書股份有限公司(アウトドア圖書(株)の意味)
刊 百五十元 (南川金一)

橋本 廣・著

『山景画集』

当山岳会の参与、高志山の会会長であると同時に、チロル山の会、山雄会など数多くの山関連の会の会員でもある橋本廣氏の画文集である。「山嶺抒情」「越中の峠」「加越山行譜」など数多くの画文集のある中の一冊で、最新作。

富山在住の画家だけに、五十作品のうち半数が「立山・剣岳とその周辺」の風景であり、残りがヒマラヤとアルプスを描いた作品で構成されている。副題にもその三地方が謳われており、表題が示すように山を描いた作品が大部分である。花の絵、人物画などが数点含まれているものの、ほとんどは雪をいただいた山容のみが描かれており、時には目前に迫り、時には遙かにあって、目映いばかりに輝きを伝えてくれる。

無駄のない、やや骨太の線ですらえ、たスケッチは的確で、雪や雲の白を塗り残した透明水彩絵の具の色調の冴えは、見るものの目を心ゆくまで楽しませてくれる。中でも、ガイドの村芦峠

寺の枝もたわわに実る柿の向こうに光る立山は雄大で、そうした画法の特徴を見事にいかしている。

それらの作品には、四百字詰め原稿用紙一枚という抑制のきいた簡潔な文章が、それぞれ添えられており、絵に対する鑑賞の興行きをさらに深めている。

「……全容が見えなくても、新緑や紅葉の向こうに白い姿が見えているのもいい。深田久弥がよく筆にした平家物語の一節「北に遠ざかりて雪白き山あり」は遠くに見えた山だけが殊の外白かったので目を引いたのだろう」という、「薬師岳冠雪」の一文は、この画文集のモチーフをよく物語っているようにうだ。

一九九四年九月 桂書房刊 一二二ページ 二千八百円 (山口裕一)

栗林一路・著

『句集 山嶺旅情』(自家版)

山路てくてく 夢でてくてく
落葉ころげる 秋に耳すます
頂上の見えたところで休む

空こんなにも広いぞ手のひらの蝸牛
何も彼も抛り出して 怠惰な刻
「山想」から「ドロミティ」まで、十二に分類された五百九十三の一行詩集。

自筆の文字と挿画による構成は、組版コスト削減などではなく、むしろ無機質な活字を嫌った著者の強い意思の表れに違いない。それが季語や定型にこだわらない自由律の一行詩に暖かみと親しみを与えている。また詞書がないのは、どの句も山好きの読者の自由な夢想に開放しているからであろう。

一九九五年四月刊 一三六ページ
頒価千五百円 連絡先・世田谷区奥沢三十四一十五 Ⅸ〇三一二三七二〇一三五四五 (小川益男)

熊谷 樞・著

『北海道の山を滑る』

地元同行者に「カヤ台風」といわれながらも、ハシーズンにわたって春の北海道の山々を山スキーで滑りまくる、そのおりの紀行文やその場でものにしたスケッチ、後日作品とした油絵をまとめた画文集。

著者は「スキーをはけば怖くない」などすでに九冊ほどの著書を手がけている関東在住の女流画家。

北海道の山にこれだけ出かける機会を作るのは大変なことと思われるが、一九八三年から九〇年にかけて個展を札幌で開いたおりのチャンス逃がすことなくの元気な姿勢は、その文体、作風によく現れているようだ。

北海道のフィールド以外に、岩木山、八甲田山、一九九一年五月のシベリア・バジャール山にもおよんでいる。

著者は山行時、素早く取り出せるように工夫したスケッチ袋なるものを胸に付けているそうだが、簡潔明瞭なタッチで臨場感あふれるスケッチを生み出すその姿を、次回は自画像としてみてみたいものだ。

一九九四年十二月 白山書房刊 二
一八ページ 千八百円(佐藤千恵子)

G・L・マロリー・著/田中純夫訳著

『エベレスト』・『付論』

ジョージ・リー・マロリーがエベレストで行方を絶ってから、今年で七十年になるという。マロリーが一九二一年、イギリスの第一次エベレスト遠征隊と、一九二二年の第二次エベレスト遠征隊に参加し、それぞれの後に、王室地理学協会とアルパインクラブの合同集会の席上で話したものがアルパインジャーナルに掲載されており、それから訳者が訳出したものが本書という。

第一章は第一次隊のエベレスト偵察行であり、ノースコルに至るまでの様子、第二章は第二次の登頂を目的とした隊がたどる人類初の八千メートルラインの体験である。高所登山による人体への影響、ポーターの働き、ルート

の状態など興味深いものがある。さらに登山の危険は天候によって大きく左右されるとしながら、マロリーはこの二次隊の体験を踏まえて、エベレストの頂上に到達することは多分不可能ではないだろう、としている。

付論は近代アルピニズムの研究で知られる著者が、多くの文献を引用しながら、文化現象としてのアルピニズムを述べ、"崇高"概念と近代アルピニズムの発生を論じている。

平成六年八月 本会越後支部発行
B6判 一七七ページ 頒価 千五百円

日本地図センター・編

国土地理院監修

地図二点

登山に地形図を携帯するのは基本中の基本であるはずだが、最近の登山者は地形図を利用しなくなった、とよくいわれる。登山道の標識が整備され、ガイドブックの概念図程度のものがあるれば十分だと考えられているせいだという。一方では、学校の地図教育に問題があるのではないかという声もある。

一、『地図利用マニュアル』

学校の教師用に作られたもので、基本的には小学校から高等学校までの地図教育を主眼とした、地図利用一般に

関するマニュアルである。したがって著者にも現場教師が多く、子供の発達段階に対する考慮の必要性が説かれるなど、教育的配慮が散見される。

教育プロパーな本であるとはいえ、一般の地図利用者にも利用されていると思う。表現などにやや生硬な感じがしないでもないが、ごく基本的な地図の使い方に関する知識が盛り込まれていたり、地図関連書の紹介や地図情報の問い合わせリストなど、地図一般の入門書の性格ももっている。地図の読図にも役立つので、山の安全性を考慮した登山教育の一つに仲間入りさせてもいいのではないだろうか。

一九九〇年四月発行 非売品

二、『地図記号のうつりかわり』

表題どおり地形図における図式や記号の変遷についてまとめた本であり、一つひとつの地図記号についてのうつりかわりが、表の形になってまとめられている。そういう意味では、登山史研究などで旧版の地形図などを解析する場合に役立つものといえる。岩石や崖、窪地、また植生記号の変化などなど、山に関連した記号の変化ぶりを眺めるだけでも楽しい。登山一般において、地図はもっと親しまれてしかるべきものではなからうか。

一九九四年三月発行 二千五百円

(山口裕二)

多彩なクルマ、多才なサービス。



東京トヨペット
千代田営業所

☎3256-5351 〒101 千代田区内神田2-1-4

ジェフリー・タビン・著

BLIND CORNERS

Adventures on Seven Continents

著者ジェフリー・タビンはエール大在学中、ふとしたことから図書館で山岳図書に親しむ。テニス選手として初めて渡欧したおりのアルプス無謀登山をきっかけに、オックスフォード留学中に西アフリカヘリツハイク、さらにケニアでの新ルートの初登攀、コロラドはアーカンソー河にかかる鉄橋からのパンジージャンプなどと冒険範囲を広げていく。ハーバード大医学部に

進んでからも東面のカンシユン壁を含む三度のエベレスト行などを経て、本書副題にもあるように七大陸の最高峰に足跡を残す。

まるで明るく気取らないアメリカ人氣質を、すべてを理解するのはなかなか難しいのだが、全編ユーモアにあふれる文体で著している。

イリヤン・ジャヤのジャングル行の後にはカルステン・ピラミッドを北壁から登頂し、頂上ではダニ族から譲り受けたベニススペース(キャプションにはネイティブ・スノー・ウェアとある)のみのスッポンポンの姿で記念写真に納まっている。

数々の第一級の冒険行における人物描写が興味深い。

書名は、先も見えず、戻ることもできない危険な曲り角(ブラインド・コーナー)をクリアするたびに劇的に変化してきた人生を顧みて、筆を執ったところからきている。これだけの冒険行の合間に外科医としてハーバード大から学位をとり、本書のカバーには、現在はロードアイランド州で実習中とあった。

エドモンド・ヒラリー卿による序文がある。

ICS Books, Inc., Merrillville,
Indiana, U.S.A., 1993, Pp196, \$24.99

(越田和男)

書籍受入報告 (1995年2月)

著者	書名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈/購入
ウェストン(著)・三井嘉雄(訳)	日本アルプス登攀日記 (東洋文庫 No. 586)	318pp/18cm	平凡社	1995	出版社寄贈
栗林一路	山嶺旅情 (句集)	134pp/21cm	栗林一路(私家版)	1995	著者寄贈
福山山岳会 (編)	煌めきの氷壁: 大山人沢事故報告書・追悼集	252pp/31cm	福山山岳会	1994	発行者寄贈
和田誠一 (編)	横浜山岳協会誕生史話	30pp/26cm	横浜山岳協会	1995	発行者寄贈
鈴木弘道	山の高さ (第2版)	278pp/20cm	日本測量協会	1994	著者寄贈
立教大学山岳部(編)	チュール合宿報告書 1990	51pp/26cm	立教大学体育会山岳部	1992	発行者寄贈
立教大学山岳部(編)	コンデ・リ合宿計画書及び報告書 1992	60pp/26cm	立教大学体育会山岳部	1992	発行者寄贈
白旗史朗(編著)・ 山岳写真の会「白い峰」(写真)	富士山この一枚: ガイドとアドバイス (カラー写真集)	236pp/30cm	日本カメラ社	1995	出版社寄贈
加藤則芳	森の聖者: 自然保護の父ジョン・ミューア	279pp/20cm	山と溪谷社	1995	出版社寄贈
岡茂雄	炉辺山話	237pp/20cm	実業之日本社	1976	小野洗氏寄贈
鈴木五郎	山のコント集	219pp/19cm	北光書房	1943	小野洗氏寄贈
ハインリッヒ・クリアー(著) ・横川文雄 (訳)	大岩壁: Verlorener Sommer	245pp/20cm	三笠書房	1958	小野洗氏寄贈

会務報告

■二月定例理事会

日時 二月九日 十八時三十五分～

二十一時

場所 日本山岳会会議室

【出席者】藤平会長、中村副会長、小倉、大倉、大森、村井、山口、片岡、松浦、伊藤、水野、南井、堀井、渡邊、溝口、中川、山本各理事、中島、川崎各監事、斎藤、湯浅、西村、宮下、重廣各常任評議員

【委任】南川、大谷各理事、神崎常任評議員

議事に先立ち、先日逝去された嶋原副会長夫人洋子さんより、故人に対して生前の好誼と葬儀に関してのお礼の挨拶が述べられた。なお、九十周年合同募金に十萬円の募金をいただいた。

【審議事項】

一、HATJ田部井淳子トラスターから国際交流青少年環境体験登山一九九五に対する名義後援依頼の件 小倉
一九九五年八月二十日(月)～二十七日(日)、中国・長白山(白頭山二七四四メートル)において第四回国際交流青少年環境体験登山を行うことに對し、名義後援の要請があった。承認

二、九十周年記念委員会の件 小倉
二月八日の委員会により、次の二委員会に委員の追加加入をお願いする。

・九十周年募金委員会常任委員として、伊丹紹泰、中村太郎、増田昌司、藤井正彦の四会員

・九十周年記念フォーラム委員会委員として、中村副会長、田部井淳子の二会員

三、山岳研究所管理人の件

承認

かねてより手配中であつたが、内田二葉さん(五十歳・長野県保母、二級教員資格を保有し、登山、ドライブ、油彩画、文学、水泳、スキー、音楽など多趣味の女性)を信濃支部の推薦を尊重し、管理人に決定したい。承認
四、会費・入会金改定の件 大倉

一月の理事会で趣旨説明したが、理解が得られたと考えるので、理事会の承認をお願いしたい。

・中島監事から「本会の会費納入率は各位の努力により高率であるが、紹介者もいることであり、なおいっそうの努力をお願いする。」

五、平成七年度総会議案の件

・事業計画案について趣旨説明 中川
・予算案について趣旨説明 大倉

継続審議

六、マカルー峰登山隊一九九五 大倉
隊員個人負担費用は千円円弱。現在まで二千五百万円の貸し出しになって

いるが、差し当たり二百万円借用支出となるので承認願いたい。承認
七、新しいクラブの発足の件 大森

「山の自然学クラブ(または研究会)」の趣旨とルール。山の自然学講座で学んだ者たちが、これを活かして自然保護の実践活動をやりやすくするためにクラブを作る。活動は自然保護専門委員会などの責任の下に行動することを条件として承認をお願いしたい。承認

【報告事項】

一、マカルー峰登山隊壮行会 中川

二月八日(水)午後六時三十分から池袋メトロポリタン・ホテルで開催、二百四十名の出席者があり、盛会であった。二、マカルー峰登山隊一九九五より 重廣

二月八日の壮行会に對してお礼を申し上げる。二月十五日に第一隊として藤平総隊長以下六名が午前十時十分、成田空港から出発するが、八時三十分(九時まで全日空と合同でセレモニーを行うので、出席をお願いする。壮行会で各隊員の応援を受けて責任を感じる費用と本会員の応援を受けて責任を感じつつ登山活動に入る。

三、九十周年合同募金 小倉
企業募金割当て表 三十三団体、個別企業六十社の担当を定めて、各位の努力をお願いする。

・二月七日現在の募金状況

会員募金 六百二十九名 一九一九口 九百五十九万六千円
企業募金 二十四社(団体) 二百四十二万円

四、青年登山懇談会 中川 片岡

平成七年二月二十五日(土)～二十六日(日)於水道橋グリーンホテル。昨年に引き続き続いて青年対象会議として開催するが、プログラムは二月十五日頃までに決めた。今回は横の組織を重視し、日本勤労者山岳連盟・山本氏、東京都山岳連盟・松本氏、日本ヒマラヤ協会・山森氏を招いて実施する。若手委員の出席を要請する。二十六日には事務局担当者会議を行う。

五、組織見直し案 中村副会長

さきに、各理事の手許に送付した案の審議をお願いする予定であつたが、時間がなく、本日は概要説明にとどめ、後日改めて見直し案審議の臨時理事会を要請したい。

【新入会員】

大西保他十二名

■臨時理事会

日時 二月二十三日(木) 十八時五十分～二十一時三十分

場所 日本山岳会会議室

【出席者】中村副会長、小倉、大倉、大森、山口、片岡、松浦、伊藤、水野、南井、渡邊、溝口、中川、大谷各理事、中島、川崎各監事

【委任】藤平会長、村井、南川、堀井、山本各理事、齋藤、湯浅、西村、宮下、神崎、重廣各常任評議員

議事

【報告事項】

一、秩父宮学術賞の件

小倉

二月十日、第三十一回秩父宮記念学術賞が本会鳥居亮会員の『山岳地域における自然エネルギーの研究』に決定。授賞式は三月十五日午後三時より工業倶楽部で行われる。

二、マカルー費用の件

大倉

中国に対して五百万円の追加払いを二次隊が持参のため、本会より仮払い支出とする。文部省スポーツ振興基金、合同募金の支出も未決なので、三月の理事会で確定報告をする。

三、マカルー峰登山隊一九九五 渡邊

二月十五日、藤平総隊長以下第一次隊が出発した。二月十六日、二月二十日付けでファックス通信があり、準備は順調に進んでいるとのことである。

四、九十周年合同募金の件

石橋

・二月二十二日現在の募金状況報告
会員募金 六百六十六名 二一〇〇・

企業募金 三十四社 四百六十万円
三月六日(月)常任募金委員会を開く。

五、阪神大震災

小倉

本部としては、義援金として各理事一人二万円の拠出を願ひ、各委員会の

委員一人二万円の義援金拠出をよびかけ、目標額を五十万円に設定し、三月末日を期限として取り組む。なお、山梨支部より問い合わせがあったが、支部の自主的判断を願った。本会員の被災状況については、「山」三月号に掲載する。

【審議事項】

一、日本山岳会組織見直しに関する取りまとめ試案の件

中村副会長

二月二日付けで各理事に届けられた提案に対して逐条審議(討議)に入る。●前文の審議につづいて

(1)入会制度について 会員数の急拡大は望まぬにしても、山歴、文化的な山の愛好者など、内容の伴った入会希望者であれば数にはこだわらない、など一部修正。

(2)受益者負担の原則 会務にかかわる部分と、会員相互負担部分の明確化など的一部修正。④項の削除など。

(3)若年層対策 ④項の削除。

(4)支部対策 各委員会への支部からの参加と交流連絡など。①項一部削除など。①項を活かして、②項の削除。

(5)中高年対策 ①項を活かして、②項の削除。

(6)委員会、部会、研究会、同好会組織の見直し。

(7)委員会の構成 常任委員六・七名、全体で十五・二十名とする。任期を経

過した委員は、協力委員、指導委員、特別委員などとして委員会行事には加わるが、決議には加わらない。新入会員は会歴二年を経過するまで、協力委員とする、など一部修正。

2月 青年部
1日 フォトビデオクラブ
3日 自然保護専門委員会
4日 連絡委員会
6日 アルパインスケッチクラブ
7日 93同期会
8日 評議員会 理事会
9日 自然保護委員会 図書委員会
13日 アルパインスキークラブ
14日 指導委員会 二火会
15日 三水会
17日 フィルムビデオ委員会
18日 自然保護専門委員会 三水会
20日 総務委員会 資料委員会
21日 フィルムビデオ委員会 科学研究委員会 アルパインスケッチクラブ
22日 会報編集委員会 百年史委員会
23日 臨時理事会 自然保護専門委員会 青年部
27日 集委員会
28日 自然保護委員会 指導委員会
2月来室者585名

ルーム日誌

右記の審議により委員会のA・B・Cグループ別としたが、Cグループの大部分は総務関連の所管である。したがってA 会務運営グループ、B 実践・研究グループとして再検討する。などの審議が重ねられ、再度、中村副会長が取りまとめ修正案として三月理事会に提案する。各理事には三月九日頃までに送付する。継続審議
三月理事会には、人事、会費値上げ、事業計画などの一括提案、また組織見直し再提案など、よろしくお願いしたい。

小倉

今年もさげんで会いましょう

INFORMATION



◆日本山岳会創立九十周年

『ブロック別式典』日程

二月二十六日の全国支部事務局担当者会議で、日程が決まりました。

九州ブロック・九重山

六月十七日(土)～十八日(日)

京都・岐阜ブロック

七月八日(土)～九日(日)

中部ブロック・編笠山、仙丈岳

八月二十六日(土)～二十七日(日)

東北ブロック・姫神山 盛岡

九月九日(土)～十日(日)

マカルー講演会

本部 新高輪プリンスホテル

十月十四日(土)

北陸ブロック・石川医王山

マカルー講演会

十月二十一日(土)～二十二日(日)

北海道ブロック 札幌

マカルー講演会

十一月十一日(土)

東海ブロック

平成八年一月二十日(土)～二十一日(日)
関西・山陰ブロック

一月二十七日(土)～二十八日(日)(予定)

◆九州ブロック・式典と登山のご案内

東九州支部

式典・講演 六月十七日(土)

場所「コンパルホール」

大分市府内町一五―三十八

日程 受付十三時 講演・十四時～十七時四十分

演題 マカルー登山報告 重廣恒夫

登山の夢 中村純二氏

懇親会 小田急センチュリーホテル

大分市府内町一四―二十八

十八時三十分～二十一時

記念山行 六月十八日(日)

九重山系「平治岳」

集合 大分駅前六時、男池登山口八時、

大戸越～平治岳～坊がつる～雨

が池越～長者原着十四時

費用 懇親会費 八千円

記念山行 六千五百円(バス代、

朝食食代)当日受付で集金

申込 連絡があり次第案内状を送付し

ます。締切りは五月十五日。

問合せ 千八七〇 大分市府内町一

三―十六 サニースポーツ内

日本山岳会東九州支部事務局・

西孝子 Tel Fax〇九七五―三二一

〇九二六

◆中部ブロック記念式典

創立90周年記念事業募金応募状況

(1995年3月8日現在)

標記の募金のご協力をお願いしたところ、多数の方々からの応募をいただきました。

会報にご芳名を掲載してお礼に替えさせていただきます。(敬称略)

累計 728名/2,287.8口/11,439,000円

●30口(150,000円)

吉村健児

●20口(100,000円)

嶋原洋子 法政大学山岳部 中央大学OB山岳会 佐久間高男

●10口(50,000円)

湯浅道男 大塚博美 東京農業大学山岳部 斎藤惇生 増江俊三 大森薫雄

●6口(30,000円)

松浦祥次郎 日下田實 富田弘平 岩村孝之

●4口(20,000円)

入澤郁夫 西孝子 片岡泰彦 藤井正彦 大谷亮 平井一正 青木昇 金子丞二 斎藤健治

●3口(15,000円)

高木碕男 山崎徹 齊藤直信

●2口(10,000円)

中保 中央大学山岳部 中村進 池本慶一 藤井保 百田高子 川越孝次 野沢豊 島田靖 藤沢山百合の会 星勝雄 西川元 禧 松村潤 長尾登之助 荻窪山百合の会 鈴木宏 太田邦介 筑木力 だけかんば山の会 濱部博一 大口善朗 宮崎和夫 庄司駒男 齊藤チヨ 浅野清彦 木村康雄 中沢仁 野田四郎 新妻徹 徳永篤司 奈良原町子 井上佑 新井陽一郎 中村泰一 小寺佳美 和田力造 藤江幾太

郎 徳田静雄 長尾悌夫 加藤節子 村上勝太郎 米川正利 阿部一孝 中川寛 陸田靖雄 長岩嘉悦 川合愛子 乾能尚 横田明男 田上敏行 小田薫 竹勝生 西尾俊子 石野繁一 宮本数男

●1口(5,000円)

藤崎昌美 神園泰比古 山本元 田畑真一 安江安宣 沢田勉 市村敏 白杉之伸 安藤文子 藤本三樹雄 横内泰美 仲村恒明 川朋子 川善市 園山鋭一

●0.6口(3,000円)

寺前紀夫

山梨支部

越後、信濃、静岡、山梨(幹事)の四支部で中部ブロックを結成し、記念行事を開催します。フォーラムは「南アルプスの山岳環境と登山の将来像」をテーマに静岡支部が担当し、仙丈岳一泊登山は信濃支部が担当します。

日程・八月二十六日(土)

山岳フォーラム・甲府市

レセプション・甲府市

・二十七日(日)日帰り登山・編笠山

・二十七日(日)日帰り登山・編笠山

仙丈岳

定員百名、参加費用一万五千円程度。

◆山業勉強会

集会委員会

山業勉強会を開きます。

日時 五月二十五日(木) 十九時

場所 日本山岳会ルーム

講師 片岡博氏

◆第十九回若葉会山行

集会委員会

越後粟ヶ岳と守門岳は、いずれも日本三百名山の一角で、新緑と越後平野の展望を楽しめます。

日時 六月十日(土)～十一日(日)

日程 十日・粟ヶ岳 十一日・守門岳

宿泊 入広瀬村民宿

集合 現地 十日七時 粟ヶ岳登山口

東京 九日二十時三十分、新宿

上高地山研新管理人決定



■山研の新管理人は内田さん

地元の信濃支部から推薦されていた内田二葉さんが、二月理事会で承認、新管理人に決定しました。内田さんは松本出身、物静かな方ですが、多趣味、芯の通った素敵な女性です。信濃支部の絶大なバックアップもあり

ります。山研に新しい風が吹くことを期待しています。会員の皆様の温かいご協力とご声援をお願いします。

◆本年から山研に休日設けます

五月十日(水) 十一日(木)

六月十四日(水) 十五日(木)

七月十二日(水) 十三日(木)

九月十三日(水) 十四日(木)

十月十一日(水) 十二日(木)

◆四月三十日オープン、申し込みは

・四月三十日(日)～五月七日(日)

東京の山岳会山研係へはがきで。

・五月八日(月)

直接山研へ電話で (Tel) 〇二六三一

九五―二五三三

駅西口スバルビル前(バス)

会費 現地参加 一万二千元(懇親会、写真代、保険料を含む)

貸し切りバス代 一万二千元

申込 氏名、性別、会員番号、年齢、

バス乗車の有無を明記の上、は

がきで日本山岳会集会委員会宛、

五月二十日(土)必着。定員五十名。

申し込んだ方に詳細案内を送付します

ので、会費の事前納入をお願いします。

◆第二回古き道を尋ねて

旧甲州街道笹子峠越、笹子駅から甲斐大和駅まで歩きます。

日時 五月二十七日(土)

集合 中央線笹子駅前十時(雨天決行)

申込 不要(詳細はルームに掲示)

◆スケッチクラブ「サン燦会」

自然を先生に、気のあった仲間とスケッチを楽しむ「サン燦会」が発足して六年あまり。三十数人で毎月一回、ハイキングをかねてのスケッチを楽しむ、こじんまりと遊んでいるわがサン燦会も山岳会に公認を申請、昨年末の理事会で承認されました。

今年度の代表 関塚貞亨、〒二二一

横浜市神奈川区三ツ沢下町九一十四

Tel 〇四五―三二二―四八二六

◆北アルプスの山開き

第四十九回上高地ウエストーン祭

北アルプスの山開きをかねて、今年

も上高地梓川河畔で、第四十九回ウエストーン祭が開催されます。碑前で講演や「ウエストーンにささげる歌」その他を合唱、記念山行もあります。山の歌の好きな方の参加を歓迎します。

主催 日本山岳会信濃支部

日時 六月四日(日)十時 碑前祭

六月三日(土) 島々六時集合(記念山行) 徳本峠

場所 上高地ウエストーン碑前

◆山里寿男「山のデッサン館」の

「中国への旅」展覧会

「山のデッサン館」は甲府盆地と南アルプスが一望できる勝沼ぶどうの丘に建つ美術館です。

展覧会 中国への旅

会期 五月二十八日(月曜日休館)

料金 一般八百円 小中高生五百円

最寄り駅 中央線勝沼ぶどう郷

Tel 〇五五三―四四―三〇四〇

日本山岳会会報 山 599 号

1995年(平成7年)4月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102

東京都千代田区四番町5-4

サンビュウハイイツ四番町

TEL 東京 (03)3261-4433

振替口座 東京3-4829

発行者 藤平正夫

編集人 伊藤 敬

印刷 株式会社 双陽社